

311ゼミナール 第5期 2023年度

避難所運営班 活動報告書

～歌津中学校防災活動を通して考える避難所運営について～



◎メンバー（全10名）

4年 嶺岸叶人、渡邊晶子

3年 一瀬辰之介、松川凜香、和田穂乃香

1年 芦野陽南、遠藤胡羽、小向翔大、増井美羽、村上陽亮

◎目次

1. 歌津中学校とは
2. 避難所運営活動とは
3. 歌津中学校でのゼミ活動の内容
 - i. 活動1日目 日程・内容・活動の詳細・インタビュー内容・感想
 - ii. 活動2日目 日程・内容・活動の詳細・インタビュー内容・感想
 - iii. 活動3日目 日程・内容・活動の詳細・インタビュー内容・感想
4. 歌津中生徒の感想と分析（Text mining の活用）
 - i. 1年生
 - ii. 2年生
 - iii. 3年生
 - iv. 全学年通じての意識の変化
5. 卒業生の振り返り・感想
6. 避難所運営活動の意義と課題
7. 総括
8. 今後のゼミ活動
9. メンバー一人一人の感想

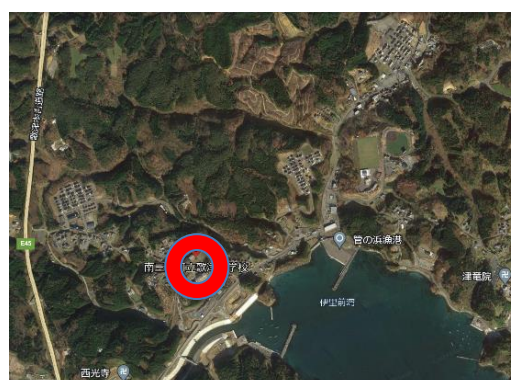
1. 歌津中学校とは

- ・生徒数：90名
- ・場所（地図参照）

宮城県本吉郡南三陸町歌津字伊里前123番地

- ・学校紹介（歌津中学校HPより）

歌津中学校は宮城県北部太平洋沿岸に位置する南三陸町の町立中学校である。生徒たちだけの力で行う避難所運営活動や少年防災クラブの活動など、防災教育が本校の教育の特色の一つとなっている。2022年度には、避難所運営活動などの運営に取り組む生徒活動「少年防災クラブ」が評価され、総務大臣表彰を受けた。



2. 避難所運営活動とは

避難所での生活の質の向上・維持のための避難者の活動や避難所の設備資源の活用、また、それらが適切に働き機能できるようにするための活動等(ex. 避難所の衛生や耐久性の管理、物質の配布管理、各種ルール作り等)を指す。

南三陸町立歌津中学校「令和5年度 第12回『避難所運営活動』実施計画」では、活動の目的(ねらい)を以下の3つとしている。

- (1) 一人一人が家族や地域のために働くという役割があることを感じ取らせ、その役割を果たすために、災害発生時に必ず生き残らなければならないという思いを強くもたせる。
- (2) 地域の一員としての自らの役割を自覚し、人と積極的にかかわり、その役割を主体的に果たすことにより、自己有用感をもたせ、「生きる力」を育む。
- (3) これまで学習した防災に関する知識及び技能等を、実際に即した場面で活用させることによって、さらなる定着を図る。

3. 歌津中学校でのゼミ活動の内容

歌津中では、毎年10月に行う本番の避難所運営活動に向けて、総合的な学習や保健体育の時間を活用して、5月から学年ごとに救急救命、瓦礫撤去、炊き出しなどの必要項目の活動に段階的に取り組んでいる。これをローテーション訓練と呼んでいる。

ゼミ活動では分担して、6月に救急救命・傷病者搬送・瓦礫撤去・火焚き、7月に炊き出しのローテーション訓練に参加、10月の本番には参加可能なメンバー全員で「活動当事者」として参加した。担当の佐藤公治先生から話を聴いたり、生徒の終了後の感想文を見させてもらったりして、避難所運営活動の成果や課題について考えた。

【活動1日目・ローテーション訓練参加】

- ・2023年6月9日
- ・参加ゼミ生 和田、村上、小向
- ・活動内容 瓦礫撤去訓練、火焚き訓練（1年生）
救急救命法訓練（2年生）
応急処置法・救助訓練、救助者搬送訓練（3年生）

◎活動内容の詳細

- ・1年生 瓦礫撤去訓練、火焚き

トラックで運ばれた土砂を地面に撒いてもらい、それらを津波によって道路上に漂着した瓦礫に見立てて、スコップやバケツなどを用いてトラックに再び戻す作業を行う。木をナタで切って、マッチを使って火をつける。教師や地域住民の方がその作業の手伝いを行った。



- ・2年生 救急救命法訓練

喉に何か詰まった時や出血した際の止血方法などを、消防職員が用意したDVDを見てその方法を学ぶ。

- ・3年生 応急処置法・救助訓練、救助者搬送訓練

実際にマネキンに包帯を巻いてみたり、友達同士で救助者役をしたりして実際にできるかを確認する。



◎担当の佐藤公治先生から活動の経緯や狙いの聴き取り

・「2010年に消防庁から防災教育のモデルクラブに指定されるが、翌年に東日本大震災に見舞われ活動を継続するか悩む。しかし、生徒たちの反応を見て、この町で生きていくためには日常の防災のところで地域で力を合わせて進めていく必要があると感じ、改めて防災の必要性を気づいた。この時のスタンスは現在でも変わらない」

・「防災と防災教育は本質的に違う。防災は、行政やそれに類似する機関が行うもの。そこでは、避難所をどのようにシステム化して、できるだけ不自由のないように暮らしていけるか、全体の幸せを考えて運営していくことを考えるのが防災を担う人たちの役割。そのため、児童生徒を対象にした防災教育とは異なる。教育現場でそのようなことを防災教育と称

して教えることには違和感がある。大人のマネをして、子どもたちが避難所運営を行っても意味がない。子どもだからこそその避難所運営を行わせる必要がある」



・「地域の方も子どもたちが生き活きとしていることに嬉しく感じている。地域の財産として捉えている」

・「座学で知識を教え込むような授業では、得意、不得意が出てしまう。どんな生徒でも楽しく、そして意識高く防災に取り組ませたい」

・「一人残らず、全員の命を守ることを目標として、防災教育を行っている。大学に行くような子

も、高校卒業した後すぐに働くような子も、全員が自分の命を守ってそして生き抜けたなら地域の人たちと助け合っていこうという意識を持って欲しい」

・「震災が起きて津波が来そうなときに、まずあなたたちがしなくてはならないことは何かを考えて欲しい、という話をしている。自分の命をまずまもらなければならないということを意識化させる。自分が助からなければ、他の人を助けることができない」

・「子供たちがいやいやながら勉強をするようなマンネリ化を招くような防災教育ではなく、実際に半分遊ぶような形で楽しみながらしていると2、3年後にはできるようになっている」

・「炊き出しの食材は、全て教育委員会から予算が出ている。他の避難所運営活動に必要な備品も予算がでて、それを用いて購入している」

・「活動やローテーション訓練では、役割決めを事前に行わない。そのことで、3年生が自主的にリーダーであると自覚することができ、その組織内で自分の役割を見つけることができるようになる。アイデンティティーを確立することに繋がる」

・「生徒の避難訓練活動と教職員の避難訓練活動は、同じことをしていても本質がリンクしない。教職員が生徒の手助けをすることは、生徒のためではなく、教職員自身のためになっている。そのため、教職員が生徒の手助けをすることを控えるようにしている」

・「地域の方や保護者に参加してもらえるように様々な手段を用いて呼びかけを行っている」

◎ゼミ生の感想

1年生の瓦礫撤去活動では教師が開始の指示を出すだけで、事前に役割分担を決めることは無かった。しかし、生徒たちが自然と自分の役割を見つけ、他者と協力しながら行っていたことが印象に残った。

また、土砂を運ぶということで肉体的にも負荷がかかる訓練だが、楽しそうに生き活きと活動している点が、他の学校で行われている避難訓練と大きく異なる点だと思った。

救助者への対応をここまで詳しく学べることは他の学校ではあまり無いので、生徒自身にとってとても良い経験になっていると思った。

この避難所運営活動は、学校外からの協力で成り立っていると感じた。特に備品などは他の学校に比べると恵まれていると感じた。歌津中学校の避難所運営活動を他の学校で行うことは難しいと思うが有意義な活動であるので、他の学校でもできるような取り組みを考える必要があると思った。

地域住民の方が訓練に積極的に参加して下さっていることは、実際に災害が発生した際に円滑な避難ができることが可能になるとともに、日頃の防犯などにも繋がると思った。

【活動2日目・ローテーション訓練参加】

- ・2023年7月19日
- ・参加ゼミ生 一瀬 松川 増井 遠藤
- ・活動内容 炊き出し（豚汁、ご飯）全学年参加

◎活動内容の詳細

全校生徒が参加する形で行われた。ひとグループ生徒5、6人と地域の方約2人ずつで16のグループに分かれて、それぞれ炊き出し活動を行った。

今回の炊き出しでは米と豚汁を作った。火をおこすためにマッチを使って付け、ゼミ生は予め地域の方が用意して下さった木材や近くにあった木の枝などにその火を移し、その後自分たちでうちわをあおぎ続けてつけた。

米は鍋を使って炊いた。米を炊くために必要な水の量や火加減が分からず、手探り状態で行った。豚汁を作る際には、必要な食材を生徒が一つひとつの炊き出し班に配っていた。歌津中学校の生徒たちは野菜の切り方を地域の方々から学びながら取り組んでいた。食べ終わった後は、全員で後片付けをした。人任せにせず、自分からてきぱきと動いていた。



◎佐藤公治先生から活動について聴き取り

- ・「避難所運営活動ではあるが、それを通して困っている人を助ける、などといった人間形成や、地域づくりにもなっている」
- ・「歌津地区には小さい子から高齢者までいる。様々な年齢層の中で中学校は13～15まで切り取ったもので、生徒たちは歌津地区の全体ではないが学校の生徒ではなく一部の地域住民として防災をさせている」
- ・「生徒たちは卒業と入学で一年ずつ出入りを繰り返している。12年続いているこの活動の最初の世代は年齢的には30代手前。その人たちが子供をもって次の世代を育てている。それ

がこの活動を続けることによって地域の人たちがそういう経験（避難所の運営）を持つ人たちになる」



・「教育現場の学校では一人一人評定を付けて個人で評価する。防災では地域という集団を教育する視点をもっていかなければいけない。そのための一段階として切り取った三年間を歌津中では切り取っている。個人だけで思いやりをもってといわれてもそれはおかしなこと。周りに人がいるから思いやりを持つ気持ちや行動につながる。防災

は教育を変えるきっかけになるのでは」

・「運営活動当日、何のセクションを設置するかは生徒たちに任されている。生徒の自主性が基本」

・「体験したことを今後どのように活かすか、どのように貢献すればよいかを考える」

・「1年生は避難所とは何か、自分は何ができるのかというのがイメージできないため、一度一通りのスキルを経験したうえで、どのように活かすかを10月6日の本番に活かす」

・「避難所運営活動の予算は全部町から出ている。今日の活動は3万円ほどの予算で、これほどの経験ができています」

◎ゼミ生の感想

米を鍋で炊いたことがなかったし、火焚きを自力で行う経験は初めてだったのでとても難しく感じた。歌津中学校の生徒が適宜教えてくれて、とても頼もしかった。

この活動はかなりの労力を使うものであったが、生徒のみんながお互いに協力しながら楽しく活動に取り組んでいる姿が印象的だった。

そして、この活動を通して、地域の方々との関わりも生まれていた。消防団の方や保護者の方、地域の方々だ。この活動は基本的には生徒主体であるが、消防団の方からは火焚きの方法を学ぶなど、活動の所々でスキルを学ぶことができていた。

このように地域の方々とのコミュニケーションをとることで、地域全体のコミュニティが創り出されるのだと感じた。地域全体での連携が、実際に災害が起こったときに最も重要となる力であると思う。コミュニティを創り出すことができる実践的な防災活動はとても学び深いものであった。とても有意義な時間を過ごすことができたと感じている。

【活動3日目・本番の避難所運営活動参加】

・2023年10月6日

・参加ゼミ生 一瀬 和田 松川 村上 増井 小向 遠藤 芦野

・活動内容 瓦礫撤去、救助者搬送・救護所運営、炊き出し、避難所本部運営、消火活動

・設定
ローテーション訓練から続いた活動の集大成として行われた。活動は在宅時、登校時から始まる。地区限定で朝の7時半に防災無線から「大地震が起きて津波警報が発令された」との放送が流れた。生徒は自分の身を守ったうえで、津波浸水域を避けながら。それぞれ登校する。到着した順から、自分の役割を見つけて避難所運営に必要な活動に取り掛かるという流れで進んだ。

◎活動内容の詳細

・瓦礫撤去

トラックから下ろした土砂を、スコップ等を使いながらトラックの荷台に運び除去した。



・救助者搬送・救護所運営

避難所内外で起きたけが人や体調不良者の搬送、救護をした。発熱、切り傷、体温低下、心肺停止、骨折等の症状があったが、傷病人の状態に応じて柔軟な対応、処置ができていた。



・炊き出し

火焚き、野菜を切り、米を炊いてカレーを炊き出しとして提供した。当日は暴風警報が発令されており、屋外での炊き出しはできなかったが、家庭科室を使用し炊き出し活動を継続した。小麦アレルギーのある避難者にも対応し、同じ材料で小麦粉を使用しない豚汁を作った。作業中も余震の知らせがあり、全員が身を守る行動を取った。



・避難所本部運営

避難所で起こるトラブル（病人、クレーム、傷害事件、火災等）に対応した。地域の情報についても掲載しており、道路の交通状況、警報等についても掲載していた。また、避難者の数についても把握し都度更新していた。



・消火活動

火災発見時はバケツリレー等で消火に臨んだ。下級生たちはバケツのリレーがうまくいかない様子が見られたが、上級生が指示を出すと、スムーズな消火ができていた。また、消防ポンプを使った消火も行われた。



◎ゼミ生の感想

例えば、ゼミ生は道端で倒れている住民役を演じ、生徒がどうするかを観察したが、登校途中の生徒たちは学校から担架を持ち寄り、ゼミ生を学校体育館の救護所まで運んだ。自主的な判断と機敏な行動に意識の高さがうかがえた。

活動にはやはり学年によって経験値に差があるようにも感じた。1年生は困りごとがあると慌てた様子が見られた。上級生は以前に体験したことがあるからなのか、落ち着いて対応することができていた。瓦礫の撤去や消火活動、炊き出し、本部の運営など分担した業の各ブースで先頭に立って指示を出して行動していたのは3年生だった。そんな姿を見て下級生たちも行動を始めていた。

各学年の感想を見ても、3年生からは「私たちが見本になる。引っ張る」という言葉が見られ、後輩たちからは「来年は先輩になるから後輩を引っ張りたい」という言葉が見られた。

このようなことを見ると、この活動を毎年継続していくことに意味があるのではないかと感じた。アレルギーでカレーが食べられない人の役をゼミ生が演じた際には、わざわざ一人だ

★まとめ

自分のことで精いっぱいになり、周りを見て行動することができなかった等の意見が最も多く挙げられていた。リーダーを決めた方がよかった、次回はリーダーを決めたい、普段の当たり前前の生活に感謝して生活を見直したい、といった意見も見られた。テキストマイニングにより、先輩のように段取りよく行動したい、来年こそ課題は改善したい、声掛けや情報共有をし合って協力して取り組みたいと、多くの2年生が考えていることが分かった。

【3年生】

● 生徒K

「頑張ったことは、がれき撤去・消火活動・救護、みんなの協力によって達成することができた。ナイフに刺されたという想定でケガ人などが多く運び込まれたときは大変だったが、やりがいがあって面白い」

● 生徒L

「頼る先輩がいなくて緊張した。最初の方の消火作業では本部への報告を誰もしてなかったが、自分から率先して連絡役を務めた。各セクションにリーダーをつけること、仲間とのコミュニケーションの強化などが課題だと思う」

● 生徒M

「本部との連携とモノの管理に課題を感じた。救護セクションには3年生はおらず、炊き出し場所の急な変更にもついていけてなかった。一方で、今まで話したことのなかった人たちと交流ができる機会であったのは良かった」

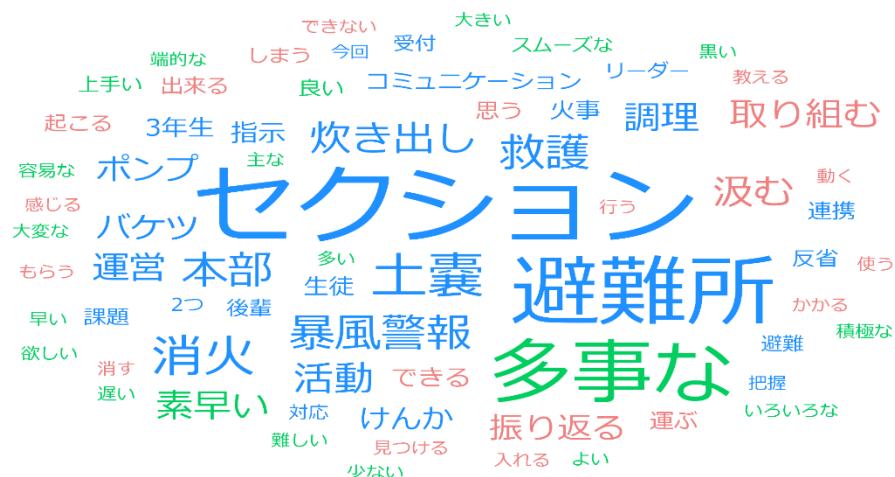
● 生徒N

「水セクションで活動したが、2年生と協力して取り組むことができた。ポリタンクの用意は上手くいったが、1か所での水くみで遅くなってしまった。指示を早く出せるようにすべきだと思う。朝の集合途中には既に倒れている人がいたが、助けることができた。今回の経験をどこかで活かしたい」

● 生徒O

「本部セクションで活動していたが、急な変更や紙の紛失などでモノの個数管理ができていなかった。しかし、他セクションとの相互確認で把握できたのは良かった。救護班からの救急車の要望をすぐに受けることができなかった。救急車がすぐに呼べる体制づくりを大切にしてほしい」

★テキストマイニングで目立った言葉→「活動」「セクション」「避難所」「3年生」「先輩」「後輩」「コミュニケーション」



★まとめ

「3年生」という、学校で一番の先輩として後輩を引っ張ることに視点を置いた文が多かった。多くの人が課題として各セクションの人的配分や突発的な仕掛けの中での役割分担ができていないことを挙げている。異学年間コミュニケーションの重要性に言及している生徒もいた。

一方で、こういった学校単位の企画は滅多にないのでいい体験だった、自分たちの経験を後輩も引き継いでほしい、といった意見も多かった。

【全学年通じての意識の変化】

全学年、当日自分の行ったこと、よかった点、改善点を書いている人がほとんどだった。また、学年ごとに見ていくと、

1年生：来年は先輩となるため、後輩を引っ張りたいということ

2年生：来年は最上級生として全体のリーダーとなり頑張りたいということ

3年生：反省点や来年以降の後輩たちへの希望

が主に書かれており、今年度の反省を生かし、来年以降、立場が変わった際に活かしたいことが書かれていた。

3年生はこの活動は今年で最後であるが、後輩に引き継いでほしいという希望は書かれていたものの、卒業後にどう活かすかに関して言及している作文は少なかった。将来につながる貴重な経験であるため、歌津中の活動時のみでなく、卒業後も活動の経験を活かすという意欲が共有されるともっとよいと感じた。

5. 卒業生の振り返り・感想

311ゼミナールの第1期生である気仙沼市大谷小学校教諭・三浦美咲先生は、歌津中の卒業生であり、避難所運営活動を体験している。質問に回答する形で三浦先生に活動を振り返ってもらい、その意義を考察してもらった。

【避難所運営活動の中で最も印象に残っている活動は何ですか】

・炊き出し 「昼食の時間までに大量のご飯を作る必要があったので、火をおこす人、野菜を切る人、ご飯を炊く人などの分担をして作業を進めたことを覚えています。みんなが一斉に動いてしまうと効率的に作業するのは難しいため、周りを見て人手が足りていないところを手伝うなど、今自分ができることを見付けて行動することが必要だったからです」

・トイレ掘り 「東日本大震災で仮設トイレなどの支援が行き届くまで不便に感じていたことはトイレでした。トイレが流れず避難所のトイレはとても不衛生でした。訓練でトイレの掘り方を学び、これは実際の避難生活で使えそうだと感じたからです」

・消火訓練 「当時、私は防災クラブに入っており、火災が発生したという想定で訓練しました。ポンプで水をくみ上げることができず、みんなでバケツリレーをしました。今回の能登地震でもそうですが、火災が起きた場所に消防車やポンプ車がすぐに来るとは限りません。その場にある物で、できる限りの消火活動をする必要があることを学びました」

【避難所運営活動で身に着いたと思うチカラを挙げてください】

「周りを見て自分にできることをする力、避難所運営に関する知識です」

【そのチカラはその後の学生生活、教員生活でどう役に立っていますか】

「周りを見て動くことは避難所運営活動だけで身に付けたことではありませんが、大勢いる中で何か自分にできる役割を見つけて行動する力の素地は養われたかと思います。学生生活や教員生活というより、人として生きていくうえで必要な能力だと思うので本当に色々なところで役立っています。部活や大学の講義・実験の時もそうですし、教員になってからは他の先生と協力して仕事を進める際に役立っていると思います」

「避難所運営の知識は実際に避難所を運営するときにならないと使うことはないかもしれませんが、どこかで災害が起きたとき、今こういうことに困っているだろうな、こんなことが必要だろうな、と想像することはできます。今回の能登半島地震でも困っている方がたくさんいると思うので、自分の被災体験や避難所運営活動を思い返しながら、何かできることはないか、考え中です」

【避難所運営活動は実際の災害対応に役に立ちますか、どんなところが役に立ちますか】

「災害対応の役に立つと思います。教員は災害があつたら避難所の運営をしなくてはなりません。避難所の運営がどのような感じか知っておくだけでも、実際に災害が起こった時の対応は変わってくると思います。また、教員でなくとも避難所で起こり得る問題や避難所生活での仕事を知っておくことで、災害が起き、避難所生活をするときに運営を手伝ったり、避難所生活をする上での様々な仕事を先頭に立って行ったりすることができ、避難所を安定して運営することにつながるのではないかと思います」

【教員になった立場で、避難所運営活動のような活動をどう評価しますか】

「災害はいつ起きるか分からないので、いつ起きてもいいように備えが必要です。身の安全を守ること、避難の仕方は考える機会があると思いますが、その後の生活まで考えたり、経験したりするというをしている学校はあまりないのではないかと思います。命を守ったら、今度は家や必要な物がなくて生活していかなければならないかもしれないので訓練として避難所運営活動をするには大きな意味があると思いますし、絶対に役に立つと思います」

【課題があるとしたら、どんな点ですか】

「避難所運営活動は私たちが中学校2年生の時に始まったと記憶しています。とても有意義な訓練でしたが、1年に1回なので、前回どのような失敗や反省があつたかをほとんど忘れた状態で訓練したような気がします。課題があるとなれば、前回の反省を踏まえた訓練ができればよかったという点です。1年に2回の実施は難しいと思うので、前年度の訓練の引継ぎなどを子供たちの間で行えるとよいのかなと思います」

【その他、避難所運営活動の意義について】

「避難所運営訓練では、避難してきた人の名簿や安否確認の表なども自分たちで作成しました。災害が起きたときは誰が生き残っているか、誰が避難しているか、取り残されている可能性がある人はいるか、などの情報の整理が追いつかず、混乱してしまうと思うので、そういった情報の受付や整理をする経験ができることも活動の良い点だと思います」

「避難所は個人がバラバラに動いているわけではなく、運営する人がいて、食料の配分だとか、けが人の手当てだとか、トイレの仕方だとかを指示し、組織的に動き、協力して共同

生活を続けていく必要があります。そのことが分かるだけでも、避難所運営活動をする意味があると思いますし、良い経験をさせてもらったなと思います」

★三浦先生の振り返り・感想を受けたゼミ生の感想

避難所運営活動の経験をしっかりと記憶し、その経験がいまの教員活動にも役に立ち、実際の災害対応にも役に立つ、と言い切る三浦先生の振り返りはとても重要だ。

特に、どんなチカラが身に着いたかという質問に「周りを見て自分にできることをする力」を挙げた点は、活動に参加した私たちにとっても納得できるものだった。生徒が周囲を見て自身の役割を見つけて行動しようとする姿が避難所運営活動では印象的だった。活動は、発災時の避難所運営に求められる意識や資質能力をはぐくむ機会になっている。

6. 避難所運営活動の意義と課題

【意義】

「自らの命を守り、ともに生きる」力を身に着けようという避難所運営活動の目標は、総じて達成できていたのではないか。自身の役割やできることを考え、見出している様子が見られ、活動は生徒の自主性の向上に繋がっているように受け止めた。

訓練で身に着けた自主性は、実際の発災時に自ら考え、適切な行動をとることに繋がると考えられる。避難所運営活動によって「自らの命を守る」という目標は達成に近づいていると思われる。

「ともに生きる」については、周りを見て行動することができなかった等の意見があったものの、コミュニケーションや周りを見ることの重要性への気づきが見られた点が重要だろう。それらを次年度の課題としている生徒が少なくないため、継続的に3年間、この活動を行うことで「ともに生きること」についても達成に近づいていると思われる。

【活動に参加したゼミ生にとっての意義】

教員を目指す学生が、実践的で先進的な防災教育の現場を見学することによって、将来の防災教育に生かす視点を手にできた。

まずは防災教育という枠にとらわれない防災活動の大切さを確認できた点大きい。校内全体の縦割りの活動と防災教育をつなげることによって、緊急時もチームワークを発揮することができたり、普段の学校行事でも団結力が高まったりすると感じた。生徒が主体になって運営する体験をすることで、指示を出したり、自分で考えたりする経験を積み重ねており、防災を超えて社会の一員としての自覚を培う学校教育の要点を確認できた。

【課題として思いついたこと】

細かい懸念として、①毎年同じようなスケジュールで避難所運営の準備から本番の活動が行われているため恒例行事になってしまい、新鮮味を打ち出すのがカギか②活動に主体的に参加している生徒とそうでない生徒との差があるようにも見えた③3.11の記憶がないという生徒が多く活動の必要感が薄れていく心配はないか—といった感想が出た。

何よりも、佐藤公治先生が中心となって育ててきた活動であるため、佐藤先生が退職した後も代替りの先生たちによって継続できるのか、という点が一番気がかりだった。他の学校にもこのような活動が広がるといいと思うため、活動のマニュアル化をしたり、活動の担い手を育てていったのりする必要があると感じた。

7. 総括

歌津中学校での避難所運営活動では、災害発生時に生徒が生きる力を、実践を通して身に着けさせていることが分かった。

日常の学校生活では、避難所運営について考えたり、具体的な運営の知識や技能を身に着けたりすることはほとんどないだろう。また、大人の指示を受けて訓練するような形だけでは、生徒が自ら感じたり、考えたりすることは限られてしまうだろう。歌津中学校の取り組みは、生徒主体で避難所運営を行っていることに大きな意義がある。

生徒が主体となって活動することによって、自ら考えて動く力や多様なケースを想定して物事を決定する力などが培われていることが分かった。非日常的な活動を通して、生徒は理想を実現させる難しさを感じたり、課題を改善するために他者を頼ったり、対話したりすることの重要性も感じている。これらの力は、災害発生時に限らず、日常生活を過ごす中でも活かせる力を育んでいるともいえる。

避難所運営活動は、自分の命を守る必要性、自分自身ができることに取り組みながら先輩後輩や地域住民と協力して生き抜く術などを学ぶことができる貴重な機会でもある。人と人との繋がりが希薄化している今日だからこそ、繋がることの価値に気づき、積極的に他者と交流を図ることで、助け合いの心をもって生きることの意義を共有できる。

生徒が率先して行動する姿は、周囲の大人に活力を与えることにもなる。生徒と一緒に教師や地域住民の方々が日頃の備えについて改めて考え、日々の過ごし方を見なおすきっかけにもなる活動だったのではないかと考える。

このように、この活動は多くの学校現場で実現させる価値が大いにあり感じられるものであった。しかし、先にも述べたように、自治体や地域住民との連携、予算の確保、校内全体での授業時数の確保、教員の活動に対する理解やモチベーション、指導者の存在などの条件が必要でもある。この全てを整えることはそう簡単なものではないだろう。普段の業務に加え、地域や生徒の実態に応じて活動を具体化させて行く必要がある。

歌津中のような複数日程に及ぶ活動を初めから実現させようとするのではなく、炊き出し訓練や避難所本部運営、救護者対応などいくつかの活動を抜粋して、少しでも何かしらの気づきが得られるように活動を企画することが現実的かもしれない、難しいことではあると思うが、ねらいを定めた上でまずは一度やってみてもらうことがこの活動が広まっていく第一歩になると考える。

8. 次年度以降のゼミ活動

本年度は歌津中学校の活動に参加したことで、避難所を運営していくに当たって必要となる活動を生徒が実際に体験し、生徒が中心となって避難所を運営する力を育んでいく様子を見ることができた。子どもだからできないだろうと考えるのではなく、地域住民の1人として積極的に行動に移せるよう、実体験を通して自分にできることをより深く考えさせることが重要なのだと考える。また、避難所運営という日常生活を送る中ではなかなか出会うことのないことを経験させることで、経験を基に臨機応変に対応する力の育成にも繋がるのではないかと考えた。自分自身が教員だったら生徒にはどのように成長してほしいのか、対象年齢を変えた時にどんな活動に取り組みせ、どのような力を身に着けさせることができるか、などについても、ゼミ生それぞれが考え、今後活かしていければと考える。

来年度は、これまでの避難所運営における課題や備え、学校現場での指導などの知見を生かしながら、避難所運営の在り方や子どもたちを対象にした訓練の具体化について考えていきたい。

9. メンバー一人一人の感想

◎4年・嶺岸叶人

今年度は、課外活動等の活動に参加できなかったことが心残りな1年でした。しかし、活動に参加できなかったことで、311ゼミという場で活動を共有することの大切さを感じた1年でもありました。私は積極的にコミュニティに加わる、作るタイプではないので、311ゼミで4年間活動したことは非常に大きなことであったと感じています。私1人では、災害防災への関心を維持し、どこかで話題としたりする機会をもつことや避難所運営活動に焦点を絞るといったことは難しかったと思います。

ここでの活動の経験が今後どう生きるか、また、今後311ゼミのような学びの場があるかは正直まだ分かっていません。ここで学んだことを少しでも生かし、よい思い出として振り返られればと思います。

◎4年・渡邊晶子

今年度は、歌津中学校のご協力のもと生徒が主体となった避難所運営活動の実際について理解を深めることができた。私は残念ながら視察に参加できず生徒の活動中のリアルな姿をみることができなかった。しかし、ゼミ生からの報告や生徒の感想文を通して生徒が責任感や向上心をもって活動に取り組んでいることが伝わってきた。

この活動は、避難所を運営するノウハウを身に付けるだけでなく、その活動を通して生徒同士の繋がりが生まれ強固なものになったり、地域の一員として互いに協力して働く意識が芽生えたりするなど、生徒の成長において多様な意義をもつ活動でありとても魅力的なものだと思う。さらに生徒が実際に体験することで、具体的なイメージをもち、より一層自分事として思考する力を高めさせていくことに繋がるのだと学んだ。

来年度からは教員として教育現場に携わらせていただく。当たり前ですが日常がいつか失われてしまうかもしれないという危機感を持ち、今後も防災に関する学びを継続していきたい。そして、いつどこで災害が起こったとしても子ども達が自らの命を守り、生きていくことができる力を育むためにも、これまでの311ゼミナール活動の中で学んだことを次の世代へと伝えていけるようにしたい。

◎3年・一瀬辰之介

1年間の集大成の訓練だが、やはり学年によって経験値に差があるように感じた。1年生は困りごとがあると慌てた様子が見られたが、上級生は以前に体験したことがあるからなのか落ち着いて対応することができていた。

瓦礫の撤去や消火活動、炊き出し、本部の運営など分担して作業をしていたが、各ブースで先頭に立って指示を出して行動していたのは3年生だった。そんな姿を見て下級生たちも行動を始めていた。各学年の感想を見ても、3年生からは私たちが見本になる。引っ張るような言葉が見られ、後輩たちからは来年は先輩になるから後輩を引っ張りたいという言葉が見られた。このようなことを見るとこの活動を継続していくことに意味があるのではないかと感じた。

個人の話になるが、カレーがアレルギーで食べられない人の役をした際に、わざわざ一人だけのために同じ材料で豚汁を作ってもらった。イレギュラーな対応だったにも関わらず丁寧な対応をしていただき、とても感謝している。本番が来ないにこしたことはないが実際の有事の際にもこの学校、地域ならば大丈夫だと感じた。この活動を通して学んだことを将来の教員生活と私生活に活かしていきたい。

◎3年・松川凜香

今年は、実際に中学校へ行き、中学生とともに活動を行ったことで、より活動に当事者意識を持てたように感じる。今までは、被災地へ行って学び考えることはできても経験することはできなかったことがほとんどだったが、自分が当事者となって一緒に活動することで、自分だったらどう行動するか、教員になったらどのように行動したいかなどを考えるきっかけとなった。

この活動を通じて感じたことは、被災地域での中学生の重要性である。高校生や保護者は町の外へ通勤、通学していることもあるし、町へ通勤してきている大人が地域に慣れているとも限らない。地域に根付いた中学生が慣れた学校を運営することで、スムーズに進められるのではないかと感じる。確かに震災を経験しておらず、人生における経験値も大人より少ない中学生には難しい、できないと感じることもあるかもしれないが、実際に中学生の様子を見て、誰かのために行動できる姿、率先して行動し、後輩に伝えていく姿に、中学生の力はとても大きいと感じた。

自分が教員のときに地震が起こった場合、私ほうまく対応できる自信はまだない。しかし、今回の経験を通して、教員として必要な力などを考え、将来につなげていけるように感じる。「やったことがないからできない。」ではなく、大学生の今からでも、たくさん吸収していきたい。

◎3年・和田穂乃香

今回歌津中学校の避難所運営活動を見学したことで、中学生の可能性を感じた。正直、最初に中学校で避難所運営活動という話を聞いた時、体験活動的なあそびみたいなものだろうと感じていた。しかし、実際に見学に行くと、生徒が主体となっているいろいろなことを考えてあるものを最大限に活用して工夫して活動をしている姿を見ることができた。

先生たちの手助けはほとんどなく、自分たちで意見を出し合って活動をしている姿を見て、いい意味で期待を裏切られた。本番では、生徒たちが登校してきた瞬間から活動が始まっており、学生が通学路で倒れていたら学校まで運んでくれるなど、一人一人の意識の高さを伺うことができた。

主に3年生が中心となって指示を出していたが、指示が行き届かないような所でも一人一人が自覚をもって動いているように感じた。様々なところで同時に火事が起きたり、人が倒れていたり、見学をしているこちらにも疲れてしまうような活動だったが、現場に走って向かう姿はとても中学生に見えず、頼もしかった。とにかくかき回してほしいとのことだったので、私は受付で外国人の役をして英語で話しかけた。中学生が何人かで私の言っていることを聞き取り、要望に答えてくれたときはとても感動した。一生懸命にこのような活動を行うことができる年齢だからこの活動が意味を持っているのだと感じた。

この活動は、避難所を作るということだけではなく、人とのかかわりを学んだり、地域の大人と関わったりする機会を得ることができるなど、とても意味のある活動だと思う。この活動を他の地域や校種でも行うにはどうしたらいいのか、これからそこを考えていければと思う。

◎1年・芦野陽南

私自身、被災地訪問などには高校生のうちから活発に参加していたこともあり、自分の地元以外の地域の状況についても知っている方だと思っていました。しかし、今回被災地となった場所で実際に避難所運営について視察し、子供たちの姿から未来を守るために今できることについて考えてみて、今までにない経験をすることができたと思いました。

初めて視察に行ってみて最も感じたことは生徒たちが自主的に、積極的に行動していたという点でした。これは、避難所運営訓練中の生徒たちの動きからはもちろん、活動後の生徒たちの振り返りからもわかります。まず、訓練中の生徒たちは先生の指示をほとんど受けることなく、自分たちで役割に分かれ、必要な支援を施し、密にコミュニケーションをとっていました。そして、訓練後の振り返りからは、生徒たちが自分自身の行動をしっかり客観的に省み、次年度につなげていこうとする姿が感じ取れました。

どちらも生徒たちが「自分たちでやるのだ」という強い責任感を持って取り組んでいる証拠だと思います。この責任感から生まれる沢山の様々な経験は、生徒たちの自信に繋がっていくのだらうと思いました。実際に人の命を救う一助を担うことができるという経験は、多くの難しい壁にぶつかることもあると思いますが、同時に生徒たちの成長に大きくプラスになるはずだと思います。今後、被災地域にある様々な学校での取り組みなど、他の事例についてもより知っていきたいと思うきっかけになりました。

◎1年・遠藤胡羽

今回は歌津中学校の防災活動を通して、避難所運営活動について考えを深めた。実際に歌津中学校の防災活動に参加してみて、私が今まで経験してきた活動と全く違って驚いたというのが率直な感想である。同時に、私が小中学校でやっていた防災訓練は実は形だけで、本当に自分に身につけていたのか振り返るきっかけにもなった。

歌津中学校の防災活動では生徒の主体性に重きを置いている。実際に災害が発生したときに指示をしてくれる大人がいるとは限らない。だからこそ、防災活動の時点から自分たちで考えて行動し、分からないことがあったら生徒同士で考え合うプロセスを積んでいるのだと感じた。そして、この活動では地域の方々との関わりが多いことも素晴らしい特色であった。

生徒の親だけでなく、実際に東日本大震災で歌津中学校に避難してきた方々や歌津の消防職員も活動に参加していた。当時のことも踏まえつつ、記憶を風化させないようにしながら、防災活動をさらに高いレベルへと発展させることができるようになっていくと感じた。

歌津中学校の生徒へのインタビューを通して、この年代の子どもたちは東日本大震災を覚えていない、知らないことに気づかされた。あの震災の経験を覚えているのは、私たちの年代くらいが最後なのかもしれない。その意識を高く持ちながら、歌津中学校以外の学校のこれからの防災活動もどうしていけばより実際に生きる力を身につけることができるのか、今回の活動を踏まえて考えを深めていきたい。

◎1年・小向翔大

今年の活動は、歌津中学校の避難所運営活動に焦点を当てた。これまで見聞きしたことの無い活動を、視察させていただけるとともに参加することができたのは自分にとってとても貴重な経験になったと感じている。避難は自分の命を守ることにあつたこれまで思っていた。しかし活動を通して、避難には災害から逃げるだけでなく、避難後の日々も避難という言葉に含まれているのだと強く考えるようになった。

そして、自分の命を守るだけでなく、他者の命も守る下地を作りながら、地域と強い関係を築く歌津中学校の活動はとても意義深く生涯役に立つ能力を身につけるものだと思う

た。教員を志すうえで避難という言葉は避けて通ることはできないと考えている。学校という施設が災害時に多くの人の命を守ることができるように教員として避難について考え続けていきたい。

元日に北陸地方を襲った災害で避難所運営などの課題が浮き彫りになったと考えている。トイレ問題や、避難所となった学校で児童生徒の学校生活をいかに守るかという避難した後の対応や制度について今後考えていきたい。加えて、教員が災害時にどのような行動をとることが最適なのかも考えていきたい。

◎1年・増井美羽

今回の活動を視察して、大きく3つの発見ができた。

1つ目は、実際に大災害が発災した際には、中学生の力が必要不可欠になるということだ。市街地でない限り人は集まりにくく、インフラが崩壊している可能性もあるため、避難所を運営することが困難になると予測される。避難所運営を経験している生徒が多ければ、その地域はより円滑な避難所運営が実施できそうであるし、自分の地域は自分で守るといった自治運営が可能であるように感じた。

2つ目は、災害は想定外の連発だが、少しでも事態を想定することが万が一のときの備えになるということだ。もちろん、災害発災時に起こるすべての事態を把握することはできない。だが、今の段階で予測できる事態を知っておくことで、災害時のパニックを軽減できると考えられる。今回も避難所運営活動を行ったことで、消火活動はバケツリレーをすると早いこと、救護所の入り口前に本部を設置すると、要治療者の搬送に手間がかかることなど課題点が多く見つかった。その課題点を一つでも多く発見できた生徒こそ、実際の避難所運営の大きな力になるように思う。

3つ目は、楽しく活動することだ。命にかかわる活動なので、厳格に、真剣に行わなければならないものだと考えていた。だが、今回の活動ではかなり楽しく活動している様子が見受けられた。生徒に声をかけた際も、「避難所運営は楽しい。」といった声が多く挙げられた。椅子に座り、教材を使って受ける防災教育よりも、実際に体験して考える防災活動の方が、身体で覚えられてより為になる活動であることを実感した。勉強や学習だと思って気を引き締めて取り組むよりも、自分の生活の身近なものとして捉え楽しく活動できることの重要性を知ることができた。

私が住む仙台市では、防災にまつわる活動を地域活動として行っている地区もあれば、一切行っていない地区もある。今回の歌津中の避難所運営活動を参考に、市街地における防災への備え、また、防災活動の在り方を考えていきたいと感じた。

◎1年・村上陽亮

私は富山県で育ったので、避難所というものがどういったものかは、テレビや教科書以上のことは知らなかった。しかし2023年度の本班の調査活動では、主に歌津中学校の「避難所運営活動」から避難所運営にとって必要なことを学ぶことができた。生徒たちは活動に対して非常に熱心であり、私にもエネルギーを与えてくれるほど笑顔で接してくれた。

突然の事態に戸惑っていたり、不安のあまり感情をコントロールできなかつたりする避難者、軽重を問わず怪我人が運ばれてくる避難所では、各人が自分にできることを見つけ、協力し合うことが重要である。生徒に対する聞き取りや感想文でも、水汲みなどの重労働も自分が率先して行う、困っている人がいれば助けに入るなど、互いに協力し合う環境ができて

いることが分かる。当活動は、文部科学省が挙げている、子供が身に着けるべき「生きる力」である課題発見・解決能力や自主性を養うことに成功していると思う。

また、生徒への聞き取りで共通していたのはその「郷土愛」の強さである。自分を守ってくれた家族や地域の人への恩返しをしたい、自分を育ててくれた自然あふれる街を守っていきたくと話してくれる人が多かった。また、地域住民も活動に積極的に協力しており、今後も継続してほしいという意見もあった。当活動は学校と地域の結びつきも深くしているのだろう。

元日に起こった令和6年奥能登半島地震では、私の地元である富山県でも被害があった。災害被害が少ないと言われてきたが、改めて学校での防災教育の在り方を考えるべきだと思う。防災面でも地元に貢献できるような教員になるためにも、今後のゼミ活動で様々な知識や経験を積んでいきたい。